武家の古都 鎌倉塾

第4回講演要旨

「歌枕の地・鎌倉を目指す頼朝」

講師：鶴見大学教授　伊藤正義さん
とき：平成20年7月5日　　ところ：鎌倉生涯学習センター第5集会室

◎京都に知られた名所『歌枕』の地・鎌倉

源頼朝は、なぜ鎌倉に幕府を開いたのだろうか。確かに鎌倉は住む場所としては理想的だ。隠国型と呼ばれる、三方を山で囲まれた地形をしているし、四神相応の地でもあるということを、1週間前に、「鎌倉を護る龍神」という講演で述べたところだ。鎌倉は、頼朝入府以来、グレードアップした理想郷のまちに変わった。では頼朝が入る前の鎌倉はどのようなまちだったのだろうか。

源頼朝は1180年（治承4）10月6日に鎌倉に入る。その頃、日本で一番有名な場所は、京都、博多、宗教の聖地は熊野、そして、相模國で有名なのは鎌倉だったということを証明したいと思う。

『歌枕歌ことば辞典』（片桐洋一著、笠間書院、1999年）に、平安時代に歌われて、京都の人に知られた「名所歌枕一覧」がある。上総・安房に歌枕の地はない。相模には足柄・鎌倉山・小余綾磯・箱根山と4つも歌枕の地がある。小余綾磯は大磯の浜で、国府があった。足柄・箱根はまさしく魔物の棲む土地だ。鎌倉はなじみ深い地だとわかる。

◎『頼朝の三つの奇跡』を三つの史料で読み解く

1180年9月と言えば、頼朝が完全に制圧していたのは上総と安房國だけで、相模國には平家方の大庭氏がいた。上総氏と下総の千葉氏も、すべて頼朝に味方していたわけではない。このような不安定な情勢のなかで、なぜ鎌倉に入らなくてはいけないかを考えてみよう。

頼朝は『三つの奇跡』といえる大ピンチに陥ってはそれを克服していく。1つ目は石橋山の合戦に敗れ、真鶴から安房に逃亡したときのことで、相模湾を渡った。2つ目は三浦氏とともに江戸湾を渡り安房に逃亡したとき、3つ目は、頼朝軍が下総から大日川（江戸川）、隅田川を渡って武蔵へ渡河したときのことだ。このピンチを克服するごとに、頼朝は東国の武士を味方につけていく。

これらを調べるときに有効な史料が3つある。ひとつは『延慶本平家物語』で、14世紀初めに成立した、一番古い形の読み本系の平家物語だ。2つめは、千葉氏に伝わった『源平闘諍録』で、13世紀末から14世紀初めに成立した、千葉氏中心の平家物語だ。3つめは鎌倉幕府の正式な歴史書『吾妻鏡』だ。

坂東武士団の分布と挙兵後の頼朝の進路

この3つの史料を読み比べて、房総から鎌倉への頼朝再生の過程と、頼朝が鎌倉入りにこだわった理由を考察した。

そこでわかることは、頼朝は、房総から武蔵を平定するときに、それぞれの国府を占領し、そこで論功行賞を行って、国単位で武士をまとめ上げていく。それを繰り返しながら進攻したことだ。

◎鎌倉入りは先祖の由来と京都へのアピール

幕府の所在地が、武蔵ではなぜいけなかったか。茨城に近いところは反頼朝勢力が残っていて危険だから根拠地がおけなかった。鎌倉も、当時は大庭氏がいたが、畠山と千葉が先遣隊で敵陣視察をしながら鎌倉に入ると、大庭氏は藤沢の奥の方に移っていて、もぬけの殻だった。だから吾妻鏡の記述でも、頼朝の鎌倉入りは3行しか書いてなく、さみしい限りである。

しかし頼朝は、鎌倉に入った瞬間に、『鎌倉殿』になって、東国の王になった。なぜ鎌倉かといえば、本拠地を置くなら、討ち死にする可能性もあるのだから、京都の人に有名な場所、先祖たちに聞こえる場所で討ち死にしたいと昔の人は考える。どうせ死ぬなら先祖の由来のところ、京都で名所としてよく知られている地で死にたい。平家にも噂として届くだろう。あの有名な鎌倉で討ち死にしたかと感動させたいと考えた。

◎権門体制を破る、新たな武家政権の誕生

1180年10月6日の段階では、頼朝は謀反人で反平家の張本人であり、暴力で軍事占領した非合法的な政権だった。頼朝の政権は、天皇体制の枠外に誕生した不良息子なのだ。天皇制の枠内で生まれた平家や平泉とは、根本的に違う。権門体制を打ち破るものとして、頼朝の政権は誕生した。

頼朝は、なぜ、鎌倉入りしたか。先祖ゆかりの地、地形に恵まれた理想郷、相模國で最も有名な『鎌倉』に入ってこそ、都の政権に新たな武家政権の誕生をアピールできると考えたのである。